

μ T-Kernel3.0 TX03 M367 IoT-Engine 向け 構築手順書書

Version. 01. 00. 02

2020. 05. 29

更新履歴

版数(日付)	内 容
1. 00. 02 (2020. 05. 29)	<ul style="list-style-type: none"> ● 3. 構築手順 Eclipse に加えて Make による構築手順を記載 ● その他（文章の直し、誤字修正など）
1. 00. 01 (2020. 03. 13)	<ul style="list-style-type: none"> ● 3. 1 開発ソフトの準備 統合開発環境 Eclipse のバージョン更新 ● 3. 3 プロジェクトの作成 C コンパイラとアセンブラの設定に、ターゲット名「_IOTE_M367」を追加 ● その他、文章の体裁の修正など（内容的な変更はなし）
1. 00. 00 (2019. 12. 11)	<ul style="list-style-type: none"> ● 初版

目次

1.	概要.....	4
1.1	目的.....	4
1.2	対象 OS およびハードウェア	4
1.3	対象開発環境.....	4
2.	C コンパイラ.....	5
2.1	GCC バージョン	5
2.2	動作検証時のオプション.....	5
2.3	インクルードパス.....	5
2.4	標準ライブラリ.....	6
3.	開発環境と構築手順.....	7
3.1	共通開発ソフトの準備.....	7
3.2	Eclipse を使用した構築手順.....	8
3.2.1	Eclipse の準備	8
3.2.2	プロジェクトの作成.....	8
3.2.3	プロジェクトのビルド.....	11
3.3	Make を使用したビルド方法	12
3.3.1	ビルド環境の準備.....	12
3.3.2	プロジェクトのビルド.....	13
4.	実機でのプログラム実行.....	14
4.1	SEGGER J-Link Software のインストール.....	14
4.2	Eclipse によるプログラムの実行.....	15
5.	アプリケーションプログラムの作成.....	17

1. 概要

1.1 目的

本書は、TRON フォーラムからソースコードが公開されてる TX03 M367 IoT-Engine 向け μ T-Kernel3.0 の開発環境の構築手順を記す。

以降、本ソフトとは前述の μ T-Kernel3.0 のソースコードを示す。

1.2 対象 OS およびハードウェア

本書は以下を対象とする。

分類	名称	備考
OS	μ T-Kernel3.00.01	TRON フォーラム
実機	TX03 M367 IoT-Engine	UC テクノロジー製
搭載マイコン	TX03 シリーズ M360 グループ TMPM367FDFG	東芝デバイス&ストレージ製

1.3 対象開発環境

本ソフトは C 言語コンパイラとして、GCC (GNU Compiler) を前提とする。

ただし、本ソフトはハードウェア依存部を除けば、標準の C 言語で記述されており、他の C 言語コンパイラへの移植も可能である。

2. C コンパイラ

2.1 GCC バージョン

本ソフトの検証に用いた GCC のバージョンを以下に記す。

GNU Arm Embedded Toolchain

(<https://developer.arm.com/open-source/gnu-toolchain/gnu-rm>)

`gcc-arm-none-eabi-9-2019-q4-major-win32`

2.2 動作検証時のオプション

本ソフトの動作検証時のコンパイラ及びリンカのオプションを示す。なお、オプションは、開発するアプリケーションに応じて適したものを指定する必要がある。

最適化オプションは、検証時には -O2 を設定している。

リンクタイム最適化 -flto (Link-time optimizer) については動作を保証しない。

その他の主なオプションを以下に示す。

コンパイルオプション

```
-mcpu=cortex-m3 -mthumb -ffreestanding
-fomit-frame-pointer -std=gnu11
```

リンクオプション

```
-mcpu=cortex-m3 -mthumb -ffreestanding
-fomit-frame-pointer -nostartfiles -static
```

2.3 インクルードパス

μT-Kernel3.0 のソースディレクトリの以下のディレクトリを指定する必要がある。

ディレクトリパス	内容
¥config	コンフィギュレーションファイル
¥include	共通ヘッダファイル
¥kernel¥knlinc	カーネル内共通ヘッダファイル

¥kernel¥knlinc は OS 内部でのみ使用するヘッダファイルである。ユーザプログラムについては、¥config と ¥include のみを使用する。

2.4 標準ライブラリ

本ソフトは基本的にはコンパイラの標準ライブラリを使用しない。ただし、演算に際してライブラリが使用される場合がある。本ソフトではデバッグサポート機能の中の演算で使用されている（`td_get_otm` および `td_get_tim` の処理内で `__aeabi_idivmod` 関数が使用されている）。

デバッグサポート機能を使用しない場合は、標準ライブラリは不要である。リンカオプションで `-nostdlib` が指定可能となる。ただし、アプリケーションで使用している場合はこの限りではない。

3. 開発環境と構築手順

本ソフトをビルドするための開発環境とそれを用いた構築手順を説明する。

本ソフトは極力、特定の開発環境に依存しないように作られている。ここでは例として、Windows の PC において、オープンソースの統合開発環境 Eclipse を使用する場合と、自動ビルドツール Make を使用する場合を説明する。

なお、ここに示す開発環境や構築手順はあくまで例であり、ユーザそれぞれの環境などによって差異がある場合がある。

3.1 共通開発ソフトの準備

C コンパイラなど共通の開発ツールをインストールする。これらは Eclipse でも Make でも使用する。

(1) C コンパイラのインストール

GCC コンパイラーを以下からダウンロードする。

GNU Arm Embedded Toolchain

<https://developer.arm.com/open-source/gnu-toolchain/gnu-rm>

本稿作成時に検証したバージョンは以下の通り。

GNU Tools for Arm Embedded Processors 9-2019q4-major Release

ダウンロードした zip ファイルを任意の場所に展開する。

(2) 開発ツールのインストール

GCC toolchain を使用するためのツール一式（make など）を以下からダウンロードする。

GNU MCU Eclipse Windows Build Tools

<https://github.com/gnu-mcu-eclipse/windows-build-tools/releases>

本稿作成時に検証したバージョンは以下の通り。

GNU MCU Eclipse Windows Build Tools v2.12 20190422

ダウンロードした zip ファイルを任意の場所に展開する。

3.2 Eclipse を使用した構築手順

3.2.1 Eclipse の準備

(1) Eclipse のインストール

Eclipse と CDT および Eclipse を実行するための Java 実行環境を準備する。
Eclipse 本体と日本語化プラグイン、その他必要なソフトをまとめたオールインワン・パッケージ Pleiades All in One は以下からダウンロード可能である。

MergeDoc Project <https://mergedoc.osdn.jp/>

本稿作成時に検証したバージョンは以下の通り。

Pleiades All in One リリース 2020-03 Full Edition

pleiades-2020-03-cpp-win-64bit-jre_20200322.zip

ダウンロードした zip ファイルを任意の場所に展開する。

(2) ワークスペースの作成

Eclipse の初回起動時、指示に従いワークスペースを作成する。ワークスペースは、Eclipse の各種設定などが保存される可能的な作業場である。

(3) GNU ARM Eclipse Plug-in の追加

Eclipse に ARM マイコン開発のためのプラグインを追加する。
メニュー「ヘルプ」→「新規ソフトウェアのインストール」→「追加」を選択する。
開いたダイアログに以下を入力

Name :	GNU ARM Eclipse Plug-ins
Location:	http://gnuarmclipse.sourceforge.net/updates

以降、画面の指示に従って「GNU ARM C/C++ Cross Development Tools」をすべてインストールする。

3.2.2 プロジェクトの作成

Eclipse にて以下の手順で本ソフトのプロジェクトを作成する。

- (1) メニュー「新規」→「C/C++ プロジェクト」を選択する。

開いた新規 C/C++プロジェクトのテンプレート画面で「C 管理ビルド」を選択する。次の C プロジェクト画面で以下を設定する。

- ・プロジェクト名：任意
- ・プロジェクトタイプ：「空のプロジェクト」選択
- ・ツールチェーン：「Cross ARM GCC」選択

以降、指示に従って設定を行う。「Cross GNU ARM Toolchain」の「Toolchain path」には、GCC を展開したディレクトリ内の`bin`ディレクトリのパスを設定する。

- (2) メニュー「ファイル」→「インポート…」を選択する。

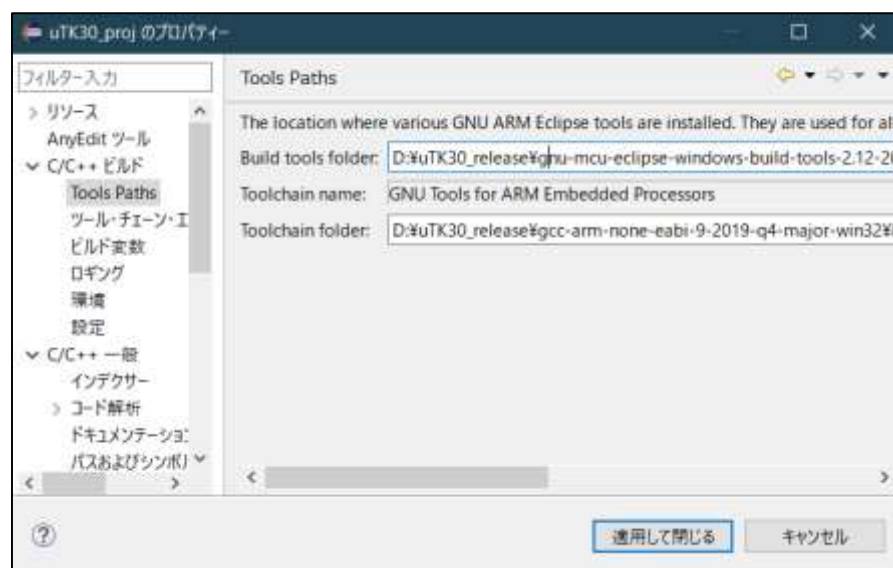
開いた選択画面で「一般」→「ファイルシステム」を選択し、ファイルシステム画面で `μT-Kernel3.0` のソースコードのディレクトリを入力する。

なお、(1)でプロジェクトのロケーションに、既にソースコードのディレクトリが存在するディレクトリを指定した場合は、インポートは不要である。

- (3) メニュー「プロジェクト」→「プロパティ」を選択する。

項目「C/C++ビルド」→「Tools Paths」を選択し、Build tools folder に GNU MCU Eclipse Windows Build Tools を展開したディレクトリ内の`bin`ディレクトリのパスを設定する。

Toolchain folder には、GCC を展開したディレクトリ内の`bin`ディレクトリのパスを設定する。



(4) 項目「C/C++ビルド」→「設定」→「ツール設定」タブ選択し、以下を設定する。

「最適化」

-ffreestanding のみ選択

「Cross ARM GNU Assembler」

「プリプロセッサ」の「定義済みのシンボル(-D)」にターゲット名を定義。

`_IOTE_M367_`

「インクルード」インクルードパスの追加

「2.3 インクルードパス」を参照

「Cross ARM GNU C Compiler」

「プリプロセッサ」の「定義済みのシンボル(-D)」にターゲット名を定義。

`_IOTE_M367_`

「インクルード」インクルードパスの追加

「2.3 インクルードパス」を参照

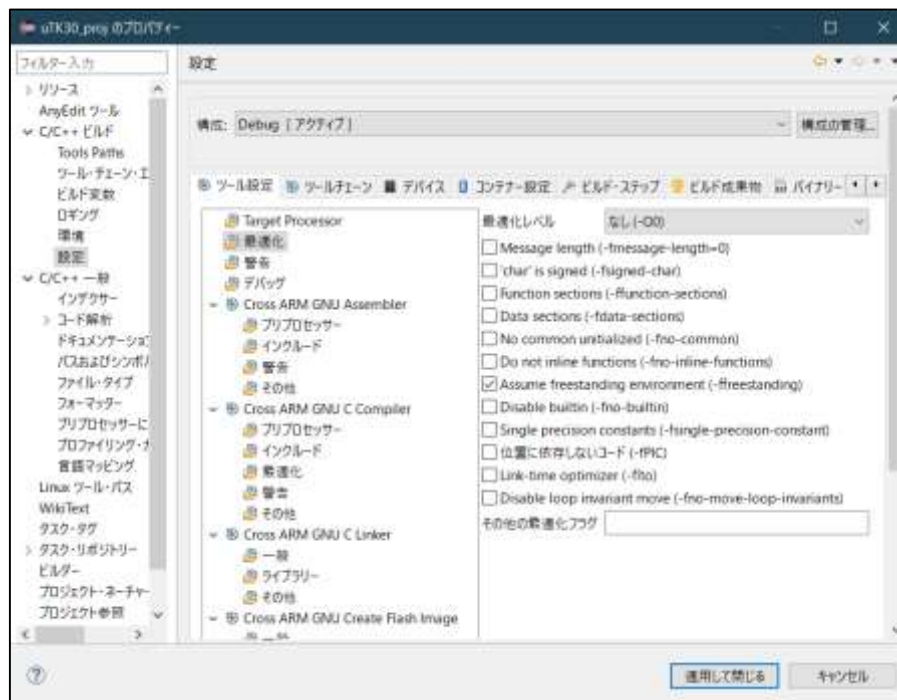
「最適化」の「言語標準」で「GNU ISO C11 (-std=gnu11)」を選択

「Cross ARM GNU C Linker」

「一般」スクリプト・ファイルに、以下のファイルのパスを設定する。

`etc¥linker¥iote_m367¥tkernel_map.ld`

標準開始ファイルを使用しない(-nostartfile)のみを選択する。



3.2.3 プロジェクトのビルド

メニュー「プロジェクト」→「プロジェクトのビルド」を選択すると、 μ T-Kernel のソースコードがコンパイル、リンクされ、実行コードの ELF ファイルが生成される。

また、メニュー「プロジェクト」→「ビルド構成」→「アクティブにする」でワーキング・セットを選択することができる。

デフォルトの設定では Release と Debug が選択可能である。

3.3 Make を使用したビルド方法

3.3.1 ビルド環境の準備

(1) 実行パスの設定

Windows のシェル (PowerShell またはコマンドプロンプト) から、GCC および Make が実行可能となるように、環境変数 path に GNU MCU Eclipse Windows Build Tools を展開したディレクトリ内の `\bin` ディレクトリのパスおよび、GCC を展開したディレクトリ内の `\bin` ディレクトリのパスを追加設定する。

(2) makefile の設定

Make 用ビルドディレクトリ (build_make) の内容を以下に示す。

名称	説明
makefile	μ T-Kernel 3.0 のビルド規則 (ルート)
iote_m367.mk	M367 IoT-Engine 用のビルド規則
iote_rx231.mk	RX231 IoT-Engine 用のビルド規則
/mtkernel_3	Make 作業用ディレクトリ

makefile ファイルの先頭の以下の定義を必要に応じて変更する。

定義名	初期値	説明
EXE_FILE	mtkernel_3	ビルドする実行ファイル名
TARGET	_IOTE_M367_	対象とするハードウェア M367 IoT-Engine の場合は「_IOTE_M367_」

また、iote_m367.mk の先頭の以下の定義を必要に応じて変更する。

定義名	初期値	説明
GCC	arm-none-eabi-gcc	C コンパイラのコマンド名
AS	arm-none-eabi-gcc	アセンブラのコマンド名
LINK	arm-none-eabi-gcc	リンカのコマンド名
CFLAGS	省略(※)	C コンパイラのオプション
ASFLAGS	省略(※)	アセンブラのオプション
LFLAGS	省略(※)	リンカのオプション
LINKFILE	省略(※)	リンク定義ファイル

※ iote_m367.mk ファイルの記述を参照

他のファイルについては OS のソースコードの変更が無い限り、変更する必要はない。
ただし、ユーザプログラムの追加等については、それぞれ対応するビルド規則を記述

する必要がある。

また `app_sample` ディレクトリ下のアプリケーションについては以下のファイルでビルド規則が記述されている。

```
build_make¥mtkernel_3¥app_sample¥subdir.mk
```

`app_sample` ディレクトリにソースファイルを追加しても対応可能なビルド規則となっているが、サブディレクトリには対応していない。サブディレクトリを作成する場合はビルド規則の記述を変更する必要がある。

3.3.2 プロジェクトのビルド

Windows のシェル (PowerShell またはコマンドプロンプト) 上で、`build_make` ディレクトリをカレントディレクトリとし、以下のコマンドを実行する。

```
make all
```

ビルドが成功すると、`build_make` ディレクトリ下に、実行コードの ELF ファイルが生成される。ELF ファイルの名称は `EXE_FILE` で指定した名称である (初期値では `mtkernel_3.elf` が生成される)。

また、以下のコマンドを実行すると、ELF ファイルおよびその他の中間生成ファイルが削除される。

```
make clean
```

4. 実機でのプログラム実行

ビルドしたプログラムを実機上で実行する方法を、実機に TX03 M367 IoT-Engine Starter Kit を使用する場合を例に説明する。

本 Kit に付属の JTAG エミュレータ J-Link を使用し、前章で説明した Eclipse の開発環境から実機に実行コードを転送し、実行、デバッグを行う。

4.1 SEGGER J-Link Software のインストール

- (1) SEGGER J-Link Software を次の Web サイトからダウンロードする。

SEGGER <https://www.segger.com/>

サイトの「Download」→「J-Link/J-Trace」を選択し、J-Link Software and Documentation Pack をダウンロードする。以下のインストーラがダウンロードされる（バージョンは変更される可能性がある）。

JLink_Windows_V656a.exe

- (2) ダウンロードしたインストーラを実行し、SEGGER J-Link Software をインストールする。
- (3) Eclipse のメニュー「ウィンドウ」→「設定」を選択し、開いたダイアログの項目「実行/デバッグ」→「SEGGER J-Link」のフォルダーに、(2) でインストールした「SEGGER J-Link Software」のディレクトリを設定する。



4.2 Eclipse によるプログラムの実行

- (1) Eclipse のメニューからメニュー「実行」→「デバッグの構成」を選択し、開いたダイアログから項目「GDB SEGGER J-Link Debugging」を選択する。
- (2) 「新規構成」ボタンを押し、「GDB SEGGER J-Link Debugging」に構成を追加する。
- (3) 追加した構成を選択し、「構成の作成、管理、実行」画面にて以下の設定を行う。

「メイン」タブ

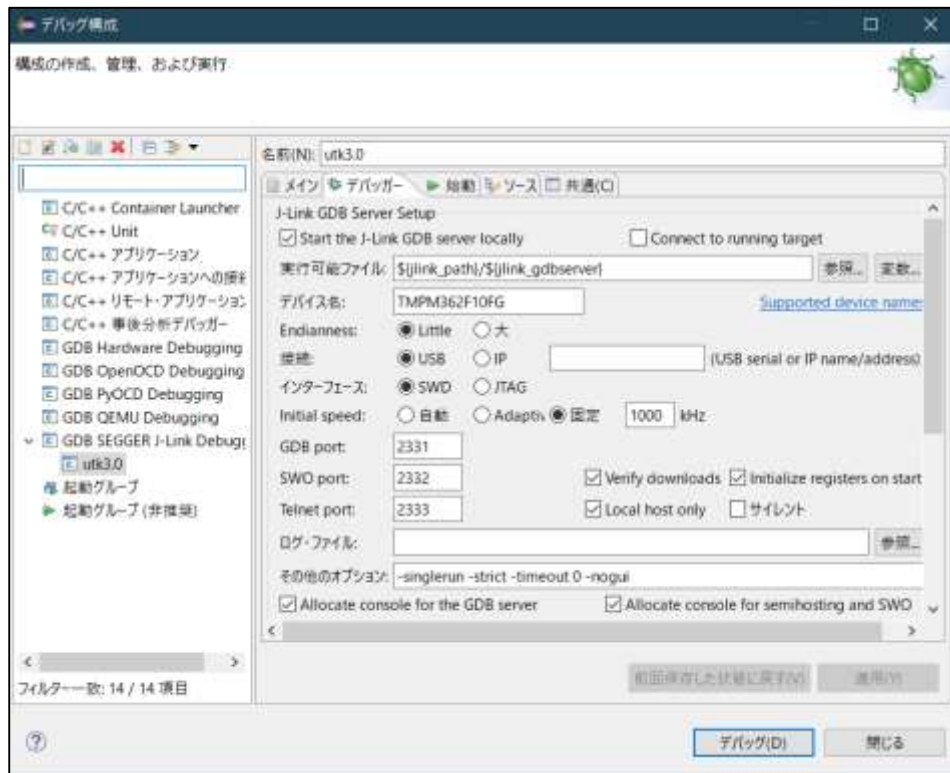
名前：(任意)を入力

プロジェクト：前項で作成したプロジェクトを指定

C/C++アプリケーション：ビルドした ELF ファイル

「デバッガー」タブ

デバイス名：「TMPM362F10FG」を入力



(4) デバッグ開始

「デバッグ」ボタンを押すとプログラムが実機に転送され、ROMに書き込まれたのち、実行される。

本ソフトでは、OS 起動後にサンプルのアプリケーションが実行される。サンプルのアプリケーションは、初期タスクから二つのタスクを生成、実行し、T-Monitor 互換ライブラリを使用してシリアル出力にメッセージを出力する簡単なプログラムである。ソースコードは以下のファイルに記述されている。

/app_sample/usermain.c

5. アプリケーションプログラムの作成

アプリケーションプログラムは、OS とは別にアプリ用のディレクトリを作成して、そこにソースコードを置き、OS と一括でコンパイル、リンクを行う。

公開している μ T-Kernel3.0 のソースコードには、サンプルのアプリケーションが含まれている。`/app_sample` ディレクトリが、サンプルのアプリケーションのディレクトリなので、これをユーザのアプリケーションのディレクトリに置き換えれば良い。

アプリケーションには、`usermain` 関数を定義する。OS は起動後に初期タスクから `usermain` 関数を実行する。詳細は μ T-Kernel3.0 共通実装仕様書「5.2.3 ユーザ定義メイン関数 `usermain`」を参照のこと。

アプリケーションから OS の機能を使用する場合は、以下のようにヘッダファイルのインクルードを行う。

```
#include <tk/tkernel.h>
```

T-Monitor 互換ライブラリを使用する場合は、さらに以下のインクルードが必要である。

```
#include <tm/tmonitor.h>
```

μ T-Kernel3.0 の機能については、 μ T-Kernel3.0 仕様書を参照のこと。

以上